

令和2年度“オール近大”新型コロナウイルス感染症 対策支援プロジェクト研究報告書

企画題目	Withコロナ時代の留学・修学旅行開発プロジェクト
研究者所属・氏名	研究代表者：神野学 共同研究者：林丈嗣・森田崇弘・山本悠真・菊川太郎・細川久美子・古川秀明・大森健史／株式会社JTB・株式会社ネクシスジャパン

1. 研究、開発・改良、提案目的・内容

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、留学・修学旅行が中止となるなか、テクノロジーを駆使した留学・修学旅行を企画・実施する。

2. 研究、開発・改良、提案経過及び成果

日々、新型コロナウイルスの感染状況が変化し、感染収束期には留学・修学旅行実施への期待も持たれたこともあり。本プロジェクト実施の必要性について、校内での理解・共有がされることが難しく、最終的には、今年度。本校で「Withコロナ時代の留学・修学旅行」を、例年の留学・修学旅行と同規模で実施することはできなかつた。

留学に関しては、株式会社ネクシスジャパンの協力を得て、「オンライン英語学習&国際交流プログラム」を本校で実施することができた。コース・学年を超えて9名の生徒しか集めることができなかつたが、試行錯誤の上で作上げたプログラム内容については、参加した生徒たちにとって充実したものとなり、生徒たちに極めて大きな成長が見られた。

修学旅行に関しては、まず、経営学部の金相俊准教授からの指導を頂戴することができ、プロジェクトの全体像を考え直すことができた。その中で、修学旅行の目的が何なのかを経営学的手法で明らかにすることが先決であるというところから、「SWOT」分析の手法を用いることとした。その際に、「オール近大」での取り組みであることを意識し、他の附属学校（和歌山・新宮・豊岡・東広島・福山・福岡・小学校）の教員にもアンケートへの協力を得ることができた。その中で、修学旅行の目的と、これからの時代の修学旅行が目指すべき方向性についてのレポート作成をすることを、本プロジェクトの着地点とすることとした。株式会社JTBの塚田泰文氏の協力を得て「オール近大プロジェクト、withコロナ時代における修学旅行の在り方 分析レポート」を完成させることができ、本校および他の附属校の教員の間で共有し、今後の修学旅行の企画・立案の参考としてもらうこととした。

3. 本研究と関連した今後の研究、開発・改良、提案計画

次年度においては、コロナ禍の収束が予測されている中で、様々な宿泊や日帰りでの国内研修（修学旅行など）が実施できることと考えられる。その中で、今回のプロジェクトを通じて得られた知見を可能な限り反映した国内研修の企画に参画したいと考えている。

4. 研究成果の発表等

発表機関名	種類(著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)

5. 開発・改良、提案課題の成果発表等

実施したもの、予定したものは特にありません。今後、機会を見つけ、今回のプロジェクトで得られた知見を広く社会へと広げていきたいと考えています。